

寅日子の「遠花火…」の句のドイツ語訳

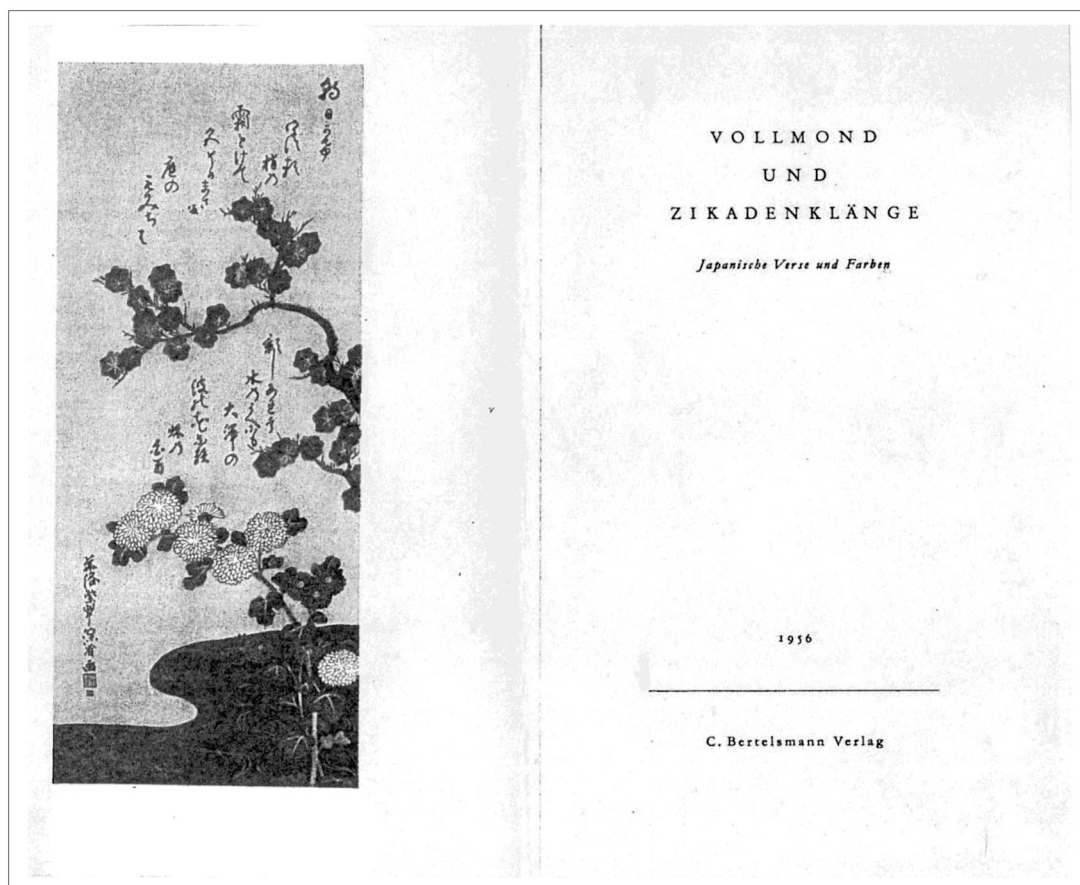
大森 一彦

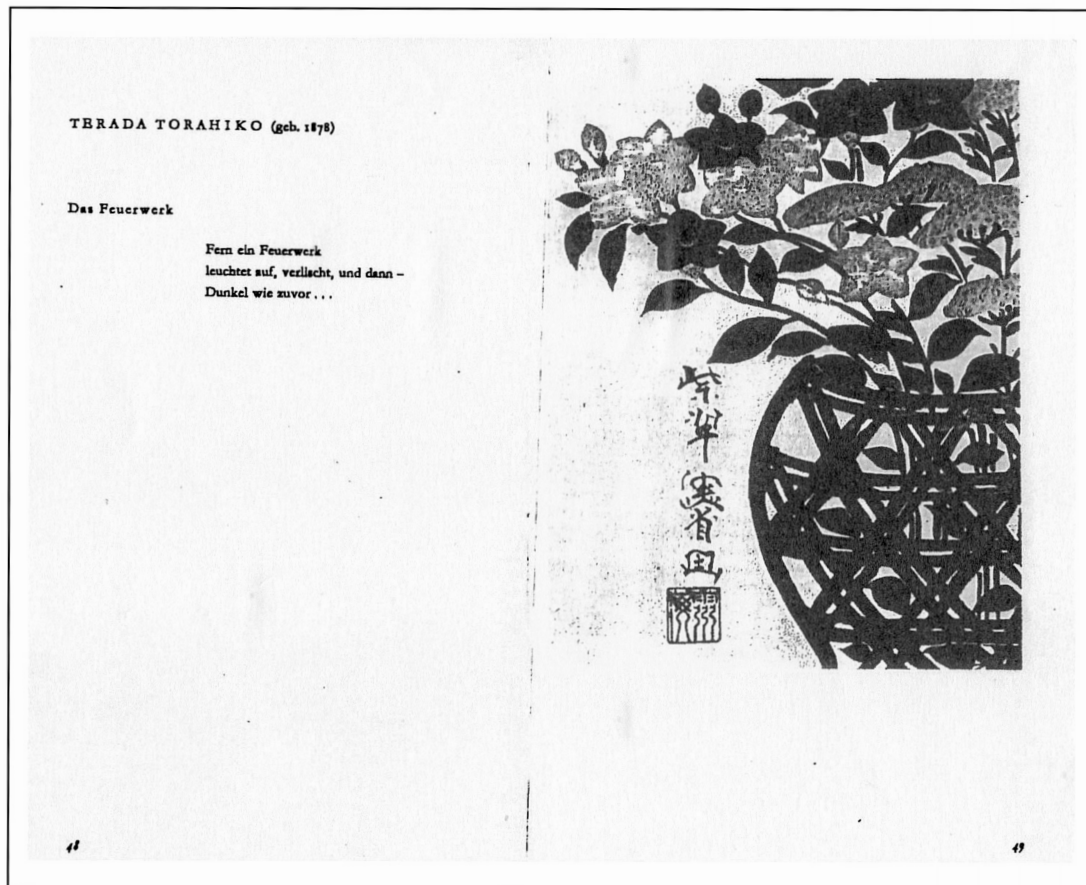
寺田寅彦の作品のフランス語訳の本1冊と、韓国語訳の本2冊の新刊情報が、本誌前号(No. 80)に出た。外国の出版社から、寅彦作品の外国語訳が1冊の本に丸ごと収められ、出版されるのは大変めずらしいことであり、寅彦ファンにとっては嬉しいニュースであった。

これに比べると小さな話題かも知れないが、今から60年程前ドイツで出版された日本の詞華集に、寅彦の一句がドイツ語訳され、載っていることを紹介しておきたい。これを私に教えて下さったのは寅彦先生のご息の寺田東一さんで、頂いた手紙(1984年6月22日付)から、主要部分をそのまま引用・転載させていただく。

「(前略)ドイツで出た俳句の訳の小冊子に、寅彦の〈遠花火〉の句がのっていましたのでお目に掛けます。五〇頁に俳句三十数首と二十数枚の色ずりの絵をのせたもので、絵は光琳、乾山、抱一等のもので、俳句は大部分は明治より前のもので、明治以後のものは寅彦の句だけです。この本は寅彦会の田中信氏から拝借してコピーしました。(後略)」。

同封されていた本のコピーから、タイトルページと口絵(下)、寅彦句のページと挿絵(次ページ)を掲げてみよう。





書名は:

Vollmond und Zikadenklänge: japanische Verse und Farben.

で、和訳すれば、『満月と蟬(せみ)の声—日本の詩と色彩』ということになる。

編訳者は、ゲロルフ・クーデンホーフ(Gerolf Coudenhove)、出版地は、ドイツの都市 ギュータースロー(Gutersloh)、出版社は C. Bertelsmann Verlag であり、1956年に出版された。この本の48ページにドイツ語訳された寅彦の句がある。

Fern ein Feuerwerk
leuchtet auf, verlischt, und dann —
Dunkel wie zuvor ...

寺田さんは、〈遠花火〉の句—とだけしか書いてないので、原句を求めて『寺田寅彦全集』第11巻「俳諧及び和歌」(岩波書店、1997)にあたってみた。〈季題別〉の分類では秋の部にあり、人事の項に〈遠花火〉の3文字を含む句が3句載っていた(p. 181)。

- (1) やゝありてぼんと鳴りけり遠花火
- (2) 水楼や欄干によれば遠花火
- (3) 遠花火開いて消えし元の闇

このうちどの句だろう。誤り無きを期するため、東北工業大学のドイツ語の先生 丹治道彦さんにお尋ねしたところ、丁寧に解説して下さいました。その時のメモをそのまま引用させていただきます。

「 遠い所で花火が一つ
ぱっと光って消える そして -
あとはもとどおりの暗やみ …

直訳すれば上の通りです。従って元の句は(3)の〈遠花火開いて消えし元の闇〉で間違いないと存じます」。

この句は、〈年代順〉配列では、昭和 3 年の個所にあり、句の下に『現代日本文学全集』と註記してある。これは初出の書名であろうか、それとも後の収録書であろうか。改造社版『現代日本文学全集』第 38 篇「現代短歌集・現代俳句集」が、昭和 4 年に出ており、それを見たところ、「寺田寅日子」のページがあつて(p. 375)、30 句掲げられており、その中にこの〈遠花火〉の句が出ていた。では初出は？『寅彦全集』の「後記」は、説明不十分でさっぱり分らない。

なお寺田さんの手紙にある〈寅彦会の田中信氏〉は、「思想」166 号〈寺田寅彦追悼号〉(1936. 3) に「航空研究所の最近の寺田実験室」を寄稿している研究者である。この興味深い情報のおおもとの発信者は田中信氏であり、このことを銘記して感謝申し上げる。